

19. 肺癌に伴った肥厚性骨関節症の骨スキャン

齋藤知保子 池田 光 小柴 隆藏
(市立札幌病院・放)
鈴木 啓二 佐藤 幹弥 (同・二内)

両下腿腫脹を主訴に来院し、両手指、両足趾にばち状指がみられ、骨シンチグラムにおいて肥厚性骨関節症の特徴的な所見を呈した肺癌の一症例を経験した。

胸部 X 線写真において左上肺野に異常陰影がみられ、TBLB にて肺癌と診断された。骨転移巣の検索に骨シンチグラフィが施行され、大腿骨、脛骨、腓骨にびまん性の左右対称的な異常集積像が認められ、両側上腕骨、遠位指節骨も明瞭に描出された。また両側橈骨、右尺骨遠位端への集積も増強していた。X 線写真所見では、大腿骨遠位、脛骨、腓骨の骨膜肥厚が著明だが、大腿骨近位および骨幹部ではごく軽度であった。これらの所見は、従来欧米で多く報告されている、肥厚性骨関節症の所見によく一致するものと思われた。

20. 胃癌の骨転移

阿部 裕之 中村 護 坂本 澄彦
(東北大・放)

当科にて骨シンチグラフィを施行した胃癌症例 25 例について、骨転移に関する検討を試みた。対象例中 13 例に骨転移が認められ、そのうち 12 例は多発性の転移であった。転移部位は腰椎が多く、骨盤、頸胸椎、肋骨等にも多く認められた。また、4 例は軀幹骨へのびまん

性転移をきたす、いわゆる播種性骨髄癌症の形態を呈した。骨シンチの所見は、転移部に一致して hot lesion を呈する例がほとんどであったが、1 例は cold lesion も混在する像を呈した。また、播種性骨髄癌症例は beautiful scan 像を呈した。胃癌の骨転移の頻度は、今回の検討および文献的にみて、経験的に考えられている以上に高率であり、骨転移との相関を示唆する要因である、疼痛・進行した stage・ALP の上昇等を認める症例は、骨転移の検索を進めるべきであると思われた。

21. 肝細胞癌の骨シンチグラフィに関する検討

加藤千恵次 中駄 邦博 塚本江利子
伊藤 和夫 古舘 正徳 (北大・核)

骨シンチグラフィを施行した肝細胞癌患者 68 例中 36 例 (58%) に異常集積を認め、その中で 9 例 (13%) に骨転移が確認され、17 例 (25%) に確認されなかった。骨転移群について転移巣の分布、単発か多発か、肝細胞癌診断時からの経過について検討した。骨転移の部位は肋骨、胸骨、骨盤骨、大腿骨の順に多く認められ、多発例は 9 例中 7 例であった。溶骨性変化が広範に認められる例では骨シンチグラフィ像にて欠損像、周辺への集積像が観察された。骨転移群で死亡が確認された 5 例は治療の種類、回数によらず全例骨転移診断後 6 か月以内に死亡した。非骨転移群と肺転移、リンパ節転移の有無、生化学データ、原発巣の形態、肝硬変の合併、A-P シェント、門脈腫瘍塞栓、食道静脈瘤の有無等について比較検討したが、いずれも有意差は認めなかった。